文化財から見る

幕末・小浜の偉人のすがた

■問い合わせ　文化課☎64・6034

「近代日本の夜明け」とも言われ、日本社会が大きく変化した明治維新。

今年は、その明治維新からちょうど150年を迎えます。

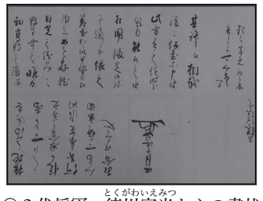
江戸時代末期、黒船の来航や、尊王攘夷運動、江戸幕府内部の対立などで揺れる時代に、小浜藩の人々も、自分の信念に基づいて大きな足跡を残しました。

今回の特集では、市の指定文化財「酒井家文庫」の史料をもとに、激動の時代に、小浜藩ゆかりの人たちがどのように考え、行動していたか、そのすがたに迫ります。

「酒井家文庫」って？

昭和16年と52年に旧藩主の酒井家より市へ寄贈された、2万6千点にのぼる史料群です。

将軍家からの書状や、杉田玄白の解体新書の初版本、国学者・伴信友関連の史料など、日本の歴史を物語る貴重な資料が数多くあり、平成25年に市の文化財に指定されています。



○3代将軍・徳川家光からの書状

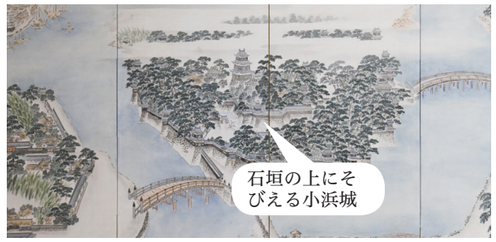
当時の社会情勢

江戸時代の後期から幕末にかけては、外国船の来航や災害・流行病が頻繁に発生し、江戸幕府や藩が支配する社会が大きく揺らぎました。特に、嘉永6（1853）年にペリーが黒船を率いて浦賀に来航すると、尊王攘夷を唱える志士たちの動きが大きくなり、幕府を守る人々との間で社会は大きく混乱しました。

当時の小浜藩の様子

酒井家文庫所蔵の屏風絵（小浜城下鳥瞰図）は、幕末期の小浜の様子を伝える貴重な史料です。

この屏風絵は2枚1対で、旧小浜町（現在の小浜地区）の町並みや、現在では石垣を残すのみである小浜城の姿などが描かれています。



○屏風絵に描かれた、旧小浜町の町並みや、石垣の上にそびえる小浜城の様子

～勤王の志士～

○梅田雲浜肖像画（個人蔵）

梅田雲浜

どんな人なの？

藩士の子として小浜に生まれ、藩校の順造館や、江戸で学びました。

外国との関係をめぐって国内が緊迫すると、藩に海防政策に関する意見を出しますが、藩はこれを受け入れず、罰として雲浜から藩士の身分を取り上げました。

ここがすごいよ「梅田雲浜」

藩を追われた後、尊王攘夷の志士の指導者として全国各地を遊説してまわりました。

長州藩の吉田松陰にも大きな影響を与えるなど、後に続く多くの志士の先駆けとして活躍しました。

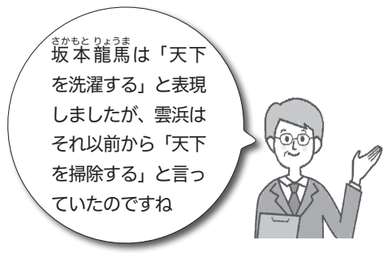
文化財に見る「すがた」

○梅田雲浜二行書（個人蔵）

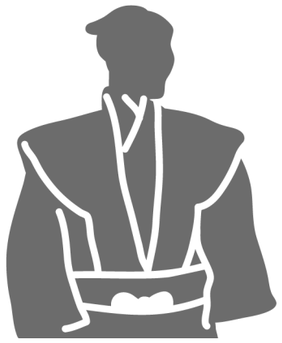
「大丈夫處世、應掃除天下、豈事一室哉」

雲浜直筆の書で、「大丈夫、世に處するは、應に天下を掃除すべし、豈に一室を事とせんや」と読みます。

「男子として生まれてきた以上、天下の悪い事柄をきれいに掃除するのが仕事であり、部屋の掃除など小さい事柄に捉われるべきではない」という意味で、志士・雲浜の心構えがうかがえます。



～第12代・14代小浜藩主～



酒井忠義

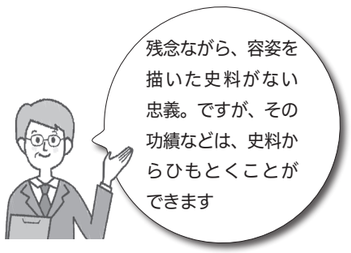
どんな人なの？

幕末期の小浜藩主にして、幕府と朝廷をつなぐ「京都所司代」を2度にわたって勤めました。

安政の大獄では、元藩士・梅田雲浜を捕らえる立場となりました。

ここがすごいよ「酒井忠義」

孝明天皇の妹・和宮と将軍・徳川家茂の婚姻（和宮降嫁）に際し、幕府側の代表者として朝廷との困難な交渉役を担い、婚姻をまとめて公武合体政策を進めました。その功績が認められて、天皇の信頼を得、「従四位上左近衛権少将」の官位を与えられました。



文化財に見る「すがた」

忠義がまとめた「和宮降嫁」の様子が、絵図として残されており、婚礼に多くの人々が携わり、盛大に行われたことを記しています。

○絵図に描かれた「和宮降嫁」の様子
「和宮様御移転御門出御入輿御行列略図」

その他の史料

ペリーが浦賀に来航したときに、江戸にいた山川登美子の伯父、山川武温が描いたアメリカ人の姿です。

東洋人とは異なる彫りの深い顔立ち、見たことのない洋装や武器、道具などが描かれています。

多くの日本人が、初めて見た大型の蒸気船や、乗ってきた西洋の人々の姿に驚き、その様子は「泰平の眠りを覚ます上喜撰たつた四杯で夜も眠れず」と風刺されました。

武温は、尊王攘夷の志士を生み、後の明治維新につながる「幕末」の開幕を、期せずして描くことになったのです。

○山川武温が描いたアメリカ人の姿
「嘉永癸丑渡来夷艦人物警衛之略分図」

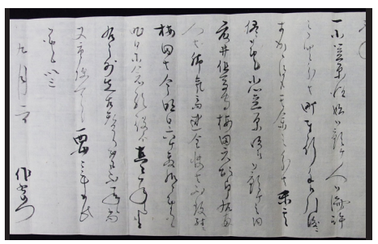
その他の史料

安政の大獄で投獄された梅田雲浜が、獄中で体調を崩し、危篤状態にある旨を、江戸藩邸にいる小浜藩士から、忠義の家臣へ知らせる書状が残っています。

忠義は最終的に雲浜を捕らえたものの、当初はその捕縛に反対していました。

捕縛によって雲浜と関係する公家にまで影響がおよび、幕府と朝廷の関係が破綻することを恐れたためで、忠義はその影響を最小限に留めようとします。

従来は「尊王攘夷運動の弾圧者」の側面が語られてきた忠義ですが、捕縛後も雲浜を気にかけていたことをうかがわせるこの史料は、立場の違いゆえに対立せざるをえなかった歴史の舞台裏を感じさせます。



○江戸藩邸の小浜藩士から、忠義の家臣へ獄中の雲浜の容体を知らせる書状

～希代の蘭学医～

杉田玄白（すぎたげんぱく）

どんな人なの？

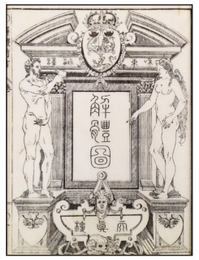
小浜藩医の子として江戸で生まれましたが、病弱であったため、一時期小浜で過ごしました。

西洋医学を学び、オランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」の解剖図の翻訳に取り組み、安永2（1773）年に「解体新書」を発刊ました。

ここがすごいよ「杉田玄白」

「解体新書」は、日本における西洋医学の第一歩となり、医学の近代化への足掛かりを作りました。また、日本で初めての本格的な西洋語からの翻訳書として、蘭学の発展にも大きな影響をおよぼしました。

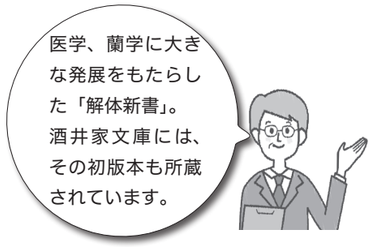
文化財に見る「すがた」



○「解体新書」の初版本に描かれた扉絵

「ターヘル・アナトミア」と罪人の腑分け（解剖）とを見比べて、その記述の正確さに驚き、蘭学者仲間の前野良沢（まえのりょうたく）らとともに翻訳に乗り出した玄白。後にその取り組みを「舵のない船で大海に乗り出したよう」だったと回顧しています。

前例のない困難な事業に、飽くなき探究心とたゆまぬ努力で挑んだ末の偉業。生涯学び続けた努力家の姿が垣間見えます。



～国学の第一人者～

伴信友（ばんのぶとも）

どんな人なの？

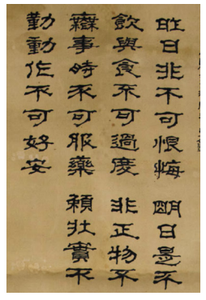
若狭地方の地名の伝承や神社のいわれなどの歴史を科学的に解明しようと、若狭に関する古い書物、老人から言い伝えを訪ね歩き研究したことを、「若狭旧事考（わかさくじこう）」としてまとめました。

また、藩主・酒井忠進（ただゆき）、忠義に従い、京都や江戸の藩邸で藩士としての仕事に取り組みながら、研究を続けました。

ここがすごいよ「伴信友」

日本古来の文化や歴史を探る「国学」の研究者として、古典の考証など多数の著作を記して大成し、「天保の四大家」と称されました。

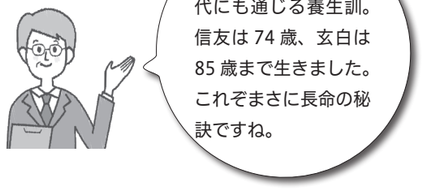
文化財に見る「すがた」



○信友の肖像に添えられた「養生七不可」

酒井家文庫に残る伴信友の肖像画には、杉田玄白が作った、健康のため日々気をつけるべき養生訓「養生七不可（ようじょうしちふか）」が書かれています。

これは、玄白が後輩である信友に与えたとも言われており、信友にとって大切な言葉であったと考えられます。



組屋家文書「山中橘内書状」

豊臣秀吉の右筆（ゆうひつ）（秘書役）山中橘内（やまなかきちない）が、秀吉の唐入り構想を、大坂にいる秀吉の妻・北政所（きたのまんどころ）に仕える侍女に伝えた書状です。

江戸時代に組屋（くみや）家の屏風の下張りとして再利用されていたものを、伴信友が見出して紹介したもので、明治時代にはすでに著名な史料として注目されていました。

この書状は、史料の傷みがひどいため、専門機関において修理を行っています。

○専門機関で修理中の「山中橘内書状」

古河屋船絵馬

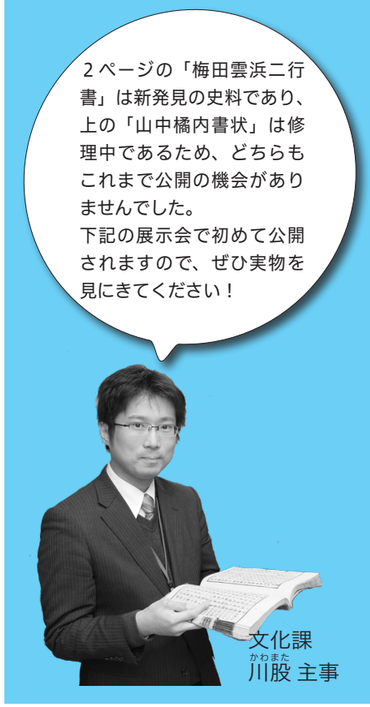
本年5月に小浜市が追加認定を受けた日本遺産「北前船寄港地・船主集落」。

その北前船主であり、酒造業や醤油醸造なども手掛けた古河屋（ふるかわや）は、日本有数の豪商として名を馳せました。

また、小浜藩の御用達として財政的に大きく支え、明治維新の折には、藩の戦費を自身の北前船を売却することで賄いました。

この絵馬には、嘉永3（1850）年に古河屋が保有していた北前船9隻が描かれており、当時の古河屋の隆盛や、これらの船が行き交った港のにぎわいをうかがい知ることができます。

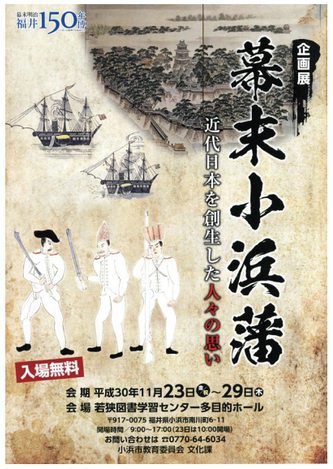
○古河屋船絵馬（個人蔵）



激動の幕末を生きた人々の「思い」に迫る企画展を開催！

市では、「酒井家文庫」や関連資料をもとにした企画展を開催します。

梅田雲浜、酒井忠義、杉田玄白、伴信友…。近代日本の〝夜明け〟となった激動の時代に生き、それぞれの立場で国を思い、力を尽くした人々の「思い」に迫ります。

幕末明治150年博企画展『幕末小浜藩　～近代日本を創生した人々の思い～』

【とき】11月23日㈮㈷～29日㈭
9時～17時（23日のみ10時から）
【ところ】若狭図書学習センター（南川町）
【料　金】無料
【問い合わせ】文化課☎64・6034